



患者家族への援助モデル

生命の危機的状態で救急搬送された患者家族への援助

保健福祉学部 看護学科
助教 辻川 季巳栄 (つじかわ きみえ)

連絡先 県立広島大学 三原キャンパス 3408号室
Tel 0848-60-1180 Fax 0848-60-1180
E-mail tsujikawa@pu-hiroshima.ac.jp

専門分野： 基礎看護学

キーワード： 家族看護 救急看護 看護教育

● 現在の研究について

一般的に『救急車で搬送された』と耳にすると生命の危機的状態＝死を連想します。

大切な家族の一人が、生命の危機的状態に瀕していることを知らされた家族も同時に危機的状況に陥ります。

人間は、危機的状態に陥っても問題を解決し均衡を取り戻そうとする力があるため、一定の期間が過ぎれば何らかの結末を迎えることとなります。この結末をできるだけ良い方向に支援するためには、看護師の危機の段階に応じた危機介入が必要です。

救急搬送された患者の多くは、生命の危機的状態であり治療を受けるか否かの意思決定ができない場合が多いです。そのため救急医療の現場では、患者家族が患者の治療についての意思決定をすることが少なくありません。家族も患者と同様に危機的状況にあり、家族も看護師からの援助を必要としています。しかし、看護師は患者家族に対し、援助をする必要性・重要性を感じながらもその関わりに戸惑ったり、診療の補助が優先されてしまったりすることで、意図的に介入できないことが多くあります。

そこで、救急搬送され生命の危機的状態にある患者の家族が、治療を受けた直後の患者と初めて面会をするまでの思いや対処について明らかにし、段階に応じた看護介入モデルを作成しました。

● 今後進めていきたい研究について

救急搬送された患者家族に対して実際に行っている看護師の看護援助を調査し、その援助を行っている時の看護師の感情や信念を明らかにすることで、生命の危機的状態で救急搬送された患者家族への援助モデルを確立したいと考えています。

また、その援助モデルを実践する看護師自身が家族員の一人であることが多くあります。看護師は女性が多い職種であり、女性は結婚、出産、子育てといった様々なライフサイクルの変化に対応していかなければなりません。しかし、家族形態の変化により、子育て世代の看護離職率が高くなっています。

看護職としての責務を果たさなければならないと思う一方で、母親として、妻として、家族の一人として果たさなければいけない役割が果たせないと葛藤を感じている女性の看護師が多いと考えます。

女性看護師が抱える葛藤について調査し、看護師として家族員として、女性看護師が責務と役割を果たし、患者家族に援助していくためにはどうしたらよいかについて検討していきたいと考えています。

● 地域・社会と連携して進めたい内容

地域に根差す病院や施設などと連携を図り、患者家族に対する援助の現状を把握し、どのように援助していけばよいかを共に考え検討していきたいと考えています。また、子育てをしながら看護の仕事の継続して行える社会を創設していきけるよう取り組んでいきたいと考えています。